

A Study on Proletarian Cultural Movement in Ishikawa Prefecture (II)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47711

石川県のプロ文化運動の一考察(II)*

——プロ芸金沢支部の結成——

宮 本 又 久

は じ め に

大正デモクラシー期においては、文芸面においても民衆芸術を求め創造しようとする運動が一定の前進を示した。更に、労働運動や農民運動の前進にさへえられて、民衆芸術をのりこえたプロレタリア文化運動が展開され始める。こうした大正後期～昭和初頭に顕著に見られる新しい文芸の展開は、いうまでもなく、各地域における文芸の担い手の拡大と彼等による地方文芸の展開なくしてはあり得なかった。それは、いわゆる中央に比較すればレベルの低いものであったにせよ、地方における新しい文芸の創造活動として注目すべきものである。

石川県のプロレタリア文化運動の研究はほとんどなく、資料の発掘も不十分なので、全く初步的な事実の確認すら困難な状況にある。昨年度のこの紀要ではトルコ座から前衛劇場への新劇運動の展開を概観して見たが、ここでは日本プロレタリア芸術連盟（プロ芸）金沢支部結成に至る動きを簡単に概観して見たい。

1 石川県の同人雑誌

大正14（1925）年前後は全国的に空前の同人雑誌全盛期と言われているが、石川県でも例外ではない。『石川県史 現代篇』第二巻は「この期の同人誌は大正10年ごろから徐々に誕生し（中略）最盛期は12～13年ごろであるが、いずれも短命なものであった。刊行せられた地域は金沢が主であるが、江沼郡、石川郡などのものもある（中略）同人たちの年齢は大体20歳を出たばかりのものであった（中略）一般に大正デ

モクラシーの一応の完成期における小市民層ないし、地方中流地主層出身の青年たちの安定した生活と心情とを反映している」と概観されており、近代詩については「作品の質は個性的に至らず、感覚的口語自由詩と称すべきものが多く、民衆詩ほどのヒューマニティーをうたったものはむしろ稀であった（中略）俳句の伝統の強く古典芸術の愛せられるこの地方において近代詩歌への関心は総合的にはやゝ稀薄であり、この時代の羣星作品の影響もあって全般的に詩作品は文人趣味的性格のものが支配的になりやすかったが、なお一部には異色の作家も現われた」と記されている。大要は尽されていると思うが、県史があげている同人誌は一部分に過ぎないので、以下、県史に見えるものも含めて、眼に触れたものを掲げて見よう。ただし、多くは新聞に散見されるもので不明確なものが多く、なお洩れているものが少なくないと思われるが、同人誌ブームの一端はうかがえると思う。（同人誌だけでなく個人誌も含めたが、一応新興の文芸誌という意味で俳句・川柳の雑誌は除外した。雑誌名の次の月は創刊の月である）

大正9年創刊と考えられるもの

- 1『第一の群』9月 福田義正 口語短歌
- 2『心音』年末か 金沢 溝口茂雄 詩・短歌

大正10年創刊と考えられるもの

- 3『洪水』1月か 金沢 葛城誠治・大森宗治
創作・詩・短歌
- 4『銀壺』3月 金沢短歌研究会 村井助正
- 5『日像』4月か 能美郡川北村 東晃朔
創作・詩・短歌など 前身は『曙光』
- 6『凶鳥』4月以降 金沢 上田藻里王・久村

*昭和50年9月16日受理

- 五郎 詩・短歌・俳句 前身は『紫苑』
- 7『成長する魂』年末か 金沢 邑井武雄
短歌・詩・評論
大正11年創刊と考えられるもの
- 8『ワカウド』(『若人』)2月 金沢 新橋芳郷
俳句・童謡・短歌・詩
- 9『晩鐘』3月 金沢 松本健二郎 詩
- 10『寂音』4月に第2号 金沢 相木司良
詩・短歌・俳句・創作
- 11『芽生え』5月に第2号 石川県師範学校
秋山荷葉・川良雄
- 12『小さき群』11月に第8号 金沢 近藤秋果
(進)・島藪秀雄 創作・詩・短歌
- 13『凡人』6月か 東彼都夫 創作・短歌
- 14『まぼろし』8月 金沢 林勝男 詩・短歌
- 15『アマチュアの集い』9月 金沢 滝波美喜
夫 創作・詩・童謡・短歌・俳句
- 16『芽生』10月 七尾町 松根繁 詩・短歌
- 17『落葉』11月 鹿島郡徳田村 土田清野
詩・短歌
- 18『印象』金沢 酒井鉄 詩・短歌
- 19『斜影』鹿島郡徳田村 佐渡作二 詩・短
歌・童謡
- 20『雑魚』鹿島郡金ヶ崎村 詩・短歌・俳句
大正12年創刊と考えられるもの
- 21『地熱』1月 金沢 厚見他嶺夫の個人詩誌
- 22『純正』19『印象』を1月に改題
- 23『点火』2月 金沢 荒野鉄之助 詩 この
年度中に『樹木』と改題か
- 24『饞饌』3月か 金沢高等工業の学生同人誌
- 25『自然』春頃 金沢 野村太喜成 詩
- 26『夢の笛』4月 金沢 久村五郎 童謡
- 27『若葉の囁』4月か 七尾町 詩・短歌
- 28『砂丘』5月か 金沢 出島時夫 詩・短歌
- 29『拓人』6月頃第2号 鶴来町 山本久助
創作・短歌・詩
- 30『蛇の座』6月頃第3号 金沢詩人会 山川
省三・松本健二郎・荒野鉄之助・村井武生
- 31『流星』7月に第3号 金沢 詩
- 32『青甕』7月に第2号 金沢 久保美濃雄
- 創作・詩・短歌・俳句
- 33『せせらぎ』8月に第2号 金沢 坪野辰夫・
上田啓・岡田弘 詩
- 34『麦笛』9月か 金沢 青い鳥詩社 短歌
- 35『黒土』10月か 金沢 大滝友二 詩
- 36『シグナル』11月か 金沢 口語短歌
- 37『開拓』12月 金沢 寺西三郎・新木友二郎
プロレタリア文芸評論誌
- 38『想思樹』12月 金沢 村田俊夫 短歌
休刊中であった『若人』と合併したもの
- 39『泥壺』12月か 金沢 中務佳尾 短歌
- 40『一隅』12月か 鹿島郡徳田村 短歌
- 41『なぎさ』金石町 詩
- 42『一白』美川町 銀鈴詩社 短歌・俳句
- 43『郷土文芸』大聖寺町 郷土文芸社
大正13年創刊と考えられるもの
- 44『晩鐘』1月 金沢 坂田小一郎 詩・短歌
- 45『蒼穹』1月か 金沢 山崎夜詩夫 詩創作
- 46『裸象』1月か 金沢 丘村泣果 創作・詩
短歌 34『麦笛』廃刊のあとを受けた
- 47『紫烟』1月か 金沢 藤井外女木 短歌
- 48『街頭詩人』2月 35『黒土』を改題
- 49『無産芸術』4月 金沢 『開拓』『蒼穹』『街
頭詩人』が合同したプロ文芸誌
- 50『星の囁き』4月 美川町 餅田三郎 詩・
短歌 7月頃『刀葉林地獄』と改題
- 51『帆走船』4月 石川郡比楽島村 中田間佐
彦・八田信吉・古田弘路 詩・短歌
- 52『夢の楽園』9月に第3号 石川郡比楽島村
古田弘路・八田信吉 詩・短歌
- 53『ともしび』5月か 小松町 創作・詩 7
月に『銀の小舟』と合併して『灯』となる
- 54『ひとみ』8月に第2号 能美郡御幸村
白江彦次 創作・短歌・俳句・詩
- 55『詩人際』8月 北陸詩人協会 村井武生
- 56『桃源』8月 39『泥壺』を改題
- 57『あこがれ』8月か 大聖寺町 二葉同人会
- 58『陽精』8月か 野々市町
- 59『無人街頭』9月 松任町 中本恕堂・三宅
信正・平松燦郎 創作・詩・短歌

- 60『情炎』9月 金沢 津田春村 短歌
 61『桃原』9月 金沢 浅田孫七郎 詩
 62『揺籃』9月 金沢 吉田宗純
 63『水さび田』10月に第2輯 金沢 津田みどりの個人短歌誌
 64『ゆうがね』10月に第2号 大聖寺町
 65『あさしほ』10月 金沢 中本芳路 短歌
 66『自身創造』10月か 金沢 詩丘薫一の個人創作雑誌
 67『ライト』10月か 金沢 山川省三 詩短歌
 68『臯月』11月か 河北郡宇野気村 油野浩之助 短歌
 69『北陸文壇』12月 金沢 小島義種 詩短歌
 70『個性』12月 金沢 人間社 太田臯蔵
 71『翁行燈』12月 金沢 小島敏種 詩
 72『炎青景』12月 金沢 大滝友二 詩
 73『三人集』 金石町 詩・短歌 41『なぎさ』から『なぎさ(三人集)』『三人集』となる棚木一郎・石田三造・大野浩一郎
 74『すずらん』 金沢 すずらん詩社
 75『白露』 金沢 八田茂路 童謡・詩・短歌 大正14年創刊と考えられるもの
 76『思潮』2月か 金沢 藤森真沙雪・島村実
 77『寂光』2月か 金沢 中島古詩路 詩短歌
 78『ひなげし』4月 金沢 高口保明・石田久夫 詩・短歌・創作
 79『情愁』4月か 金沢 安江孝一郎 短歌
 80『炎士人』7月か 金沢 島藪秀雄 詩
 81『仰望』8月 江沼郡動橋村 田畑善兵衛・西出茶鳩・中出盛好 短歌
 82『黎鐘』9月に第2号 河北郡内灘村 彦坂政雄 創作・詩・短歌
 83『前奏曲』10月か 金沢 太田臯三の個人誌
 84『光芒』11月 金沢 松永敏 創作・小品
 85『新唱』11月 大聖寺町 秋山荷葉 詩短歌
 86『一本木』11月に第2輯 松崎緑郎個人詩誌
 87『未踏林』12月に第2輯 小谷絃 創作・詩 大正15年創刊と考えられるもの
 88『個人創作』1月 金沢 橋本政男の個人誌
 89『原始林』1月 78『ひなげし』を改題

- 90『山葡萄』1月 金沢 山辰次の個人雑誌
 91『三人』1月か 小松町 佐野保・大村正次 高橋茂男 戯曲など
 92『地平線』2月か 鹿島郡熊木村 室木豊春 戯曲・創作・詩・短歌・俳句
 93『李の家』5月頃第2輯 能美郡川北村 中村庄真・北野耕 詩
 94『彗星塔』5月か 金沢 佳川三岐三
 95『矢車』5月か 金沢 短歌・詩・創作
 96『馬酔木』5月 金沢 藤井外女木 短歌
 97『紫焰』6月頃第2輯 江沼郡東谷奥村 上出一夫 詩・短歌・創作など
 98『掌』8月 金沢詩話会 島藪秀雄
 99『壺』8月 金沢 中屋虹路の個人誌
 100『日本海詩人』石川版 12月
 101『二重唱』 大聖寺町 秋山荷葉 詩短歌 大正15年末までに百種類を超える文芸雑誌の発行は、その多くが短命だったとはいえ、驚くべき数である。このような詩・短歌の勃興については、例えば棚木一良は「金沢詩壇の人々」(『北陸毎日新聞』—以下『北毎』と略記—大正15・11・25)で

思うに大正10年、松本福督・溝口茂雄氏の「心音」、小島貞一氏の「日本詩人」への登竜が烽火となって喧々騒々、金沢も種々の変遷をへて今日の隆盛をみているのだ。

と回想しており、細川美夜路は「北国歌壇夜話」(『北国新聞』—以下『北国』と略記—大正13・10・25)で

私の眼に映じた此の二三年の地方歌壇の情勢なるものは、確か大正11年位に始まる。遠くは小松、美川、松任、津幡等までに月に二三回も歌会があった。松任に於ける中島芳花君の主催だったか、其の会合77~78人にも及んだと思う。

と述べていて、ともに大正10~11年頃が勃興期だったことを裏書きしている。

以上の同人誌で注目されるのは、6『凶鳥』、7『成長する魂』、23『点火』、28『砂丘』、71『翁行燈』、78『ひなげし』(89『原始林』)、84『光芒』などが金沢市内の中学生を中心としており、しかも当時金沢ではかなり注目された雑誌だった

たことである。次に、以上の雑誌以外にも中学生や中学生程度の年令層の活躍が多かったことである。第三には59『無人街頭』が松任を中心とした年少教師グループの雑誌だったことや、志村亮吉(渡辺知重)・柏野葉路・白尾舜二郎・厚見他嶺夫などの小・中学校教師の活躍が見られたこと。第四には『北海』児童欄投稿出身者を結集して大正10年に若人社が作られ、この若人社が8『若人』を発売したことが示しているように、新聞の児童欄が文学青年育成の役割を果たしたこと、更に文芸欄が彼等に活躍の舞台を提供したこと。第五には、以上の如き盛況の中でプロ派の雑誌としては僅かに37『開拓』、49『無産芸術』の二つだけしかなかったこと。第六には大正12年に歌集『あけぼの』を出版した米山久子ら一部歌人を除いては、女性の活躍があまり見られなかったこと。などである。

以上を併せ考えると、大正自由教育の中での児童達の文芸への関心のひろがりをも一つの大きな基盤として、新聞の児童欄などで文芸への志向を強めた若者達が中学校・師範学校などで文学青年ぶりを発揮し、更に諸般の事情で中学校などに進学できなかった人達、また、中学卒業後更に上級の学校に進学し得なかった人達が、彼等のやみ難き知的欲求の充足を文芸に求めて行ったこと、こうしたことが、第一次世界大戦後から昭和恐慌までの相対的な安定期のなかで、爆発的な同人誌ブームを生み出したと考えられる。しかし、これら同人誌が一部文学青年のものであった所に大きな限界もあり、市民的な文芸の形成というほどには至らなかったとせねばならない。

同人誌の中では3『洪水』が金沢機関車の労働者達を中心としており、或は25『自然』同人の菅谷栄一が箔打労働者であったというように、文学青年の中には労働者も少なかったであろうが、この点についてはなお今後の調査にまたねばならない。たゞ、プロ派の文芸誌が僅かに二種という所に示されているように、プロレタリア文芸の展開される可能性を持ちながら

も、組織的な運動を推進する主体的条件はまだ熟していなかったのである。

2 民衆詩派と石川県の詩人

大正期の詩壇の一つの特色は、民衆詩派の活躍にあった。福田正夫・白鳥省吾らの民衆詩派の詩活動は大正4～5年頃から始まったとされているが、彼等の着実な人生詩、しかも社会主義的なものにも或程度の共鳴をも示す自由主義的な思想傾向をもった平明な詩は、詩の大衆化に大きな役割を果たしたと言える。民衆詩派に対立するのは言わば芸術派(萩原朔太郎・北原白秋・室生犀星ら)であり、またプロ芸術派である。民衆詩派はこの両派のはさみ打ちにあって、大正末期には衰退したとされているが、全国的に彼等が及ぼした影響は少なかったと考えられる。

石川県で大正10～11年頃に詩・短歌が勃興したとき、それは民衆芸術とどのようなかゝわりを持っていたのであろうか。既に引用したように県史は、当時の詩が文人趣味的性格のものが支配的になりやすかったと述べており、確かに俳句趣味的な詩が多い。しかし、民衆詩派の一定の影響は無くはなかったのである。例を前掲2『心音』、4『銀壺』、5『日像』にとって見よう。

『銀壺』第2号には吉田絃二郎の「新生の芸術」が載せられており、そこには

我々民族の最大多数を占め、最も人間的な苦悩や、社会的屈辱や、不合理の下に悩んでいる庶民階級の人々の命となり、力となることの芸術でなければならぬ。

と述べられていた。「銀壺第二号」(『北海』大正10・5・21)で藤野生はこの吉田の言葉を承けて次のように述べている。

芸術の遊戯や享楽の目的となった時代は疾く過ぎた。極まりなき混沌と焦燥と不安と人間苦とに包まれた世界、この世界を対象とする芸術こそ真の芸術であり、民衆の命となる芸術でなければならぬ。此の意味を以て短歌は民衆芸術の先駆を為さねばならぬ。

藤野生とは『北海』で文芸欄を担当していた

藤野伊一であろうか。藤野と同じ期待を『銀壺』に抱いたのは高井迷ひ野・津田春村の平民倶楽部であった。平民倶楽部は『銀壺』創刊号に祝辞をのせ、第二号には「短歌は民衆芸術です、人間の心持を歌うに最も短歌は都合がよいと思います。自己の為に、民衆の為に大いに吾々は歌いたいのです」との言葉をのせている。平民倶楽部及び高井は不明であるが、津田は前掲60『情炎』などで活躍した歌人である。

この『銀壺』同人の中に、後に石川県の社会運動の中で活躍する寺西三郎・清水一二の両名が含まれていたことも注目される。

寺西三郎の短歌

○流し行く女の三味のもつれより

わが憂しことの湧き来るものか(創刊号)

○果てしなく蹴りてゆかなむ此の小石

独り心の淋しきままに (三号)

清水一二の短歌

○朝霧の磯灰白み渚辺に

舟出す漁夫の声はよろしも (二号)

次に『日像』であるが、これは川北村の農村青年グループの同人誌で、後に社会主義運動に参加して弾圧を受けた北陸詩人聯盟の中村庄真の名前も見え、暁鳥敏門下の異端者グループ『氾濫』の藤原鉄乗の寄稿もある。同人には金沢の久村五郎・小島小夜夫、松任の中島芳花らもあり、前掲3『洪水』の藤井外女木らの寄稿もあって、ガリ版(活字印刷の号もある)の小雑誌ながら注目すべき存在である。この『日像』の編輯者東晃朔(孝朔)は2巻5号(大正11年5月)の「葉桜の窓より」で

物質的に恵まれない故の願望に枯渇した魂がフット真我に帰った時、人間の悲哀を感じる。其時に悲哀を救うサムシングが無ければならぬ。其のサムシングこそ芸術であり愛であり信仰である。

此の意味に於て島田清次郎『地上』や西田天香の『懺悔の生活』賀川豊彦『死線を越えて』の社会に枯渇した民衆にウォルカムされるのは当り前だ(中略)始めは通俗な小説より入り、創作を超え、端的表現たる詩にまで達して来た。

と述べている。爆発的なベストセラーとなった

『地上』や『死線を越えて』を人間の悲哀を救う芸術と見、枯渇した魂に訴えるものは遂に端的表現たる詩でなければならぬとしたものである。また小島小夜夫も同じ号で、

現文壇はたしかに行詰っている、所謂ブルジョア芸術の幻滅によって新しくプロレタリア芸術の台頭するのは必然の結果ではあるまいか。(中略)

民衆芸術とは人間全体が有する生命—そのものが民衆芸術だ、だから民衆芸術を論ずる前に先ず自己の生命に目覚めねばならぬ。

と述べていた。

『心音』は金沢医専生溝口茂雄らの同人誌であるが、大正10年1月号から松本福督が指導者格として『心音』に入った。『心音』第4号によれば松本は抒情詩人をもって任じており、民衆詩派に対しては芸術のレベルを低くしたという否定的評価しか与えていない。しかし『石川県史 現代篇』が『心音』について「詩の結晶度は高くないが柔軟なヒューマニズム詩が多く」と評しているように、溝口茂雄らの詩は松本福督の抒情詩とは趣きを異にし、いくらか民衆詩派的な要素を持っていた。

『心音』は大正10年限りで廃刊されたようであるが、溝口茂雄は大正10年10月以降11年にかけて、『北毎』に『成長する魂』に精力的に詩論を展開した。彼の詩論はかなり揺れ動いているが、注目すべき発言をあげて見ると、

私は最後に北国の民衆に向って叫ぶ(中略)お前等のその叫びを、そしてお前等のその悩みを、詩によって現し、詩によって治せ。((『北毎』大正10・10・25)

『日本詩人』の新年号で加藤介春氏の『青い蟹』を読む、室生氏の『枇杷の花』を読む(中略)こうした詩こそ私の久しく望んでいたものである。((『北毎』大正11・1・26)

ヴェルハーレンじゃないが民衆を導き、民衆と握手している芸術家の少さよ。短歌、俳句、川柳、それらは二義的の意味に於てのみ認容できよう(中略)詩の民衆化、それは詩をして、ブルジョアの玩弄物より、プロレタリアの唄として、一般民衆の思想を反映し、指導し、よりよい生活にまで、之等民衆を導かんとする詩の運動である。((『北毎』大正11・1・31)

一面民衆と接触し、世界的愛を必要とする反面に、我等は、我等の祖先よりの伝統的風習にも思いを運ぶ

必要を感じる。(『北毎』大正11・2・28)

萩原氏の『新しき欲情』読みたいと思っている(中略)今の詩壇で萩原氏位私の魂を動かす詩を発表する人は無い。(『成長する魂』大正11年8月号)

〔引用者補、溝口は現詩壇に百田・福田・白鳥・川路らの詩話会と、北原・日夏・三木・西条らの新詩会の二潮流があるとする〕前者は力と勢と、運転と、騒音と、そして民衆を相手のおしゃべりと幾分自分勝手の理窟でいくけれど、後者は色彩と香気と、情緒と、静鬼とそして自然を相手の沈黙とで詩を生みそだてていくのである。前者は工場の労働者の悲惨な生活を歌っているのに、後者は時に砂浜に消える月見草の影を惜んでいる。(『北毎』大正11・11・12)

〔引用者補、福田・百田等の詩は〕私達はこの詩によって、私達の生活のうたがひを感じ得る餘裕がないばかりでなく、気の弱い私なぞは餘りの強烈な色彩で昏倒しそうに息苦しい(中略)〔引用者補、西条・北原・三木等の詩は、〕前者の現実的な詩で疲労しきった私達は、ここにまた餘り現実離れのした静かな仙境を見出すことに驚かされる。(『北毎』大正11・11・14)

以上に明らかなように、溝口は民衆詩派への傾倒をかなり強く示しながらも、結局は昏倒しそうな息苦しさについて行けないものを感じ、かと言って砂丘に消える月見草の影を惜しむような西条八十らにも満足できなかった。他方彼は犀星や朔太郎に共鳴して行くが、溝口の行きつくところは人生派抒情詩人といわれた犀星や、その著『青猫』(大正12年1月)の序で「私の情緒は激情という範疇に属しない。むしろそれはしづかな靈魂ののすたるちやであり、かの春の夜に聴く横笛のひびきである」と言った朔太郎ではなかったかと考えられる。なお溝口は大正11年に金沢医専を卒業し、翌年には金沢を去っていたものと考えられる。

さて、以上の例から見て、大正10~11年頃の石川県の文芸界が、民衆芸術の主張や民衆詩派と無関係でなかったことは明らかである。大正11年7月22日に金沢詩人会が詩及び詩劇の朗読会を持った時にとりあげられた詩が、『日本詩人』大正11年3月号に発表された福田正夫の「嘆きの石」であったことにもその一端が示されていた。だが、一口に民衆芸術的傾向と言っても、それは貴族趣味的な高踏性や花鳥風月的

な俳句趣味を斥けて、庶民的な人間性に眼をすえると言った意味であって、藤野生や東晃朔に共通するものは人間的な悲哀のなぐさめとなる芸術というほどの主張であろうし、溝口の出発点もそして到達点も、やはり同じ所に求められるのではなかろうか。石川県の短歌では、西出朝風が石川県出身であり彼が大正4年から『北国』の「北国歌壇」の選者であったこともあって、一抹の哀愁をたゞえ、時として多少デカダンの生活派口語短歌が一部歌人に歓迎されていたが、これも同じ傾向の現われと見ることができるであろう。

このような民衆芸術的傾向と本質的には同じものと言えるであろうが、やゝニュアンスを異にしているものは小島小夜夫に見られたようなプロレタリア芸術を求める方向である。溝口も一時はそうした傾向を見せた。プロレタリア芸術を求めると言っても、小島が自己の生命に目覚めることを説いているように、ヒューマニズム的なものではあるが、多少なりとも社会的な眼が開かれようとしているということである。『北毎』(大正11・6・21)にのっている小島の「白路を踏む」をあげて見よう。

六月の真昼は——石も爆発しそうだ——蒸し暑い日が曇に動き——炎々と燃えあがる。——白雲の如き砂煙を捲いて——戦車は過ぎて行く。——キラリと光るダイヤの指環の持ち主と——金縁眼鏡にプラチナメタルの金鎖を下げた——夫婦連れが店へ入った。——その後を労働者は喘ぐように——白路を踏んで行く。

また前掲12『小さき群』の近藤秋果は大正11年10月に詩集『貧しき心の収穫』を出版しているが、その中から2つの詩を紹介しよう。

朝鮮人の顔

終電車がいま通っていった——木津からきた桃売の——赤黒い顔した女が——今日の売上高をしらべてる——人影が人影をふんでいた——はなやかな夏の夜も——静かにおさまりきって——イルミネーションはすごく光っている——海を渡り山を越え——あめ売りに内地にきた——朝鮮人は——あめ箱の上に細く光る——蠟燭をさびしくながめていた。

子をうしないし兄に
 かえらぬ子のなきがらに——すがりつきて——若
 き母は泣きじゃくる——雨の音はうら淋しく——病
 院のガラス窓をたたく夜——北より西へ幾千里——
 遠くはなれたシベリヤの果——子をうしないし兄
 は——今いずこ——。

小島や近藤に社会性があると言っても常識的
 な域を出ていないが、それにしても彼等は民衆
 詩派の枠を超える萌芽を持っていたとは言える
 であろう。

3 『開拓』『無産芸術』と 北陸詩人協会

大正12年末創刊の前掲37『開拓』と翌年の
 49『無産芸術』とは、短命ながら石川県でのブ
 ロレタリア文芸運動の萌芽として注目される。
 両誌については『北陸歴科研会報』第8号で
 簡単に触れたので、以下要点を記すと、(1)『開
 拓』創刊に先立つこの年の7月には金沢の社会
 主義者末友政喜らの歩兵35聯隊事件がおきて
 おり、これを機として日頃当局から警戒されて
 いた人々の家宅捜索が行なわれた。印刷工の安
 村庸二・清水某(或は清水一二か)、末友と交際
 のあった四高生泉隆らである。(2)これより先、
 大正11年には安村庸二・清水一二・横川七太
 郎・寺西三郎らは労働運動のために上京してい
 た。(3)寺西三郎は関東大震災のあと金沢に帰
 り、四高生泉隆・新木友二郎らの協力を得て10
 月に開拓社を結成した。『開拓』には安村・清
 水・横川らの上京組が参加し、小島小夜夫も投
 稿している。(4)『開拓』は3号まで発行した
 と見られるが大正13年4月に『蒼穹』『街頭詩
 人』と合併して『無産芸術』となった。『街頭詩
 人』の大滝友二には、「もしわれわれがプロレタ
 リアの反抗運動をよしとするならば、そこでわ
 れわれの芸術も真理の前に明らかな旗幟をかか
 げなければならないのである」との認識があっ
 た。(5)寺西三郎は再び上京していたので『無
 産芸術』には関係がない。『無産芸術』は創刊号・
 五月号の発行が新聞に報道されているが、以後

は明らかではない。

以上、両誌について知り得ることは余りにも
 乏しいが、こゝで注目されるのは開拓社が寺西
 三郎らの労働組合運動家と四高生との協力で結
 成されていることである。『銀壺』同人であった
 寺西・清水らは東京での労働組合運動を通じて
 プロレタリア文学に眼を開き、彼等を核として
 金沢での社会主義的な啓蒙運動が、文学運動の
 形で展開される。他方、岡良一氏の『わが反骨
 の記』などによれば、四高社会科学研究会の発足
 は大正12年9月であるという。そして開拓社に
 協力した泉隆・新木友二郎は四高社研の中心人
 物でもあった。直接的には寺西の帰郷と四高社
 研の発足が時期を同じうし、労働運動家と学生
 が結びついたのである。小島小夜夫や大滝友二
 に見られるように、県下の文学青年の中にもブ
 ロレタリア文芸を求めようとする機運は確かに
 現われていた。しかしそれを一つの組織的な運
 動として展開して行くためには、東京での労働
 組合運動経験者で歌人でもあった寺西三郎のイ
 ニシエティヴが必要であったのである。

この当時の四高の『北辰会雑誌』を見ると学
 校の検閲の下に出される雑誌の限界でもあろう
 が、プロ文芸的なものは全くうかがわれない。
 しかし、社研発足という時点では恐らくプロ文
 芸への関心を抱いた学生も現われつつあったで
 あろうと思われる。少くとも藤森真沙雪(政行)
 はその一人であった。草山芳雄(在東京)の「無
 産芸術に進むという藤森真沙雪へ」(『北国』大
 正13・11・15)によれば、藤森は日本美術学校
 の日本画科に入学したが中途退学して四高理科
 に入学した。

本年2月以降、君は東京に発行する文芸雑誌『曠野』
 に「漂浪」「子猫を棄てる」の2篇を発表した。無産芸
 術の味方として、ヒシヒシと身に迫る無産者の生活の
 哀れさを書いている。しかも此頃『文芸戦線』の同人
 の元へ出入している。

と草山は書いている。草山のこの一文の趣旨は
 北陸の山林王布施丑造の甥という有産階級に属
 する藤森が、無産芸術に入れる筈はない、無事

に四高を卒業せよと勧告しているものである。事実、藤森は無産芸術には入り得なかったが、のち『北毎』記者として活躍し、一時トルコ座にも入った藤森が大正13年当時『文芸戦線』(大正13年4月創刊)に接近していたことは注目されよう。藤森が大正13年中に『北国』『北毎』に発表した詩や戯曲を見ると、キリスト教的な罪の意識を思わせるもの、或は封建的拘束と人間性との葛藤といったものが描かれており、これから考えれば彼のヒューマニズムが無産芸術への接近をなさしめたものと思われる。『北毎』記者としての彼の文芸面での活躍を見ても、社会主義とは明確に一線を画しながら、封建的なもの、国家主義的なもの、帝国主義的なものに対するヒューマニズムの立場からの抵抗の姿勢がうかがわれる。

『開拓』から『無産芸術』への発展が見られた大正13年には、北陸三県の詩人を結集した北陸詩人協会の結成があった。「北陸詩人協会創設下相談会」(『北毎』大正13・1・25)によれば、大正12年末に福井詩話会の河原忠夫・島崎圭一が金沢の詩人達に働きかけたのを契機として、1月19日に下相談会が開かれた。小島貞一・厚見他嶺夫・室生犀星らの先輩詩人が力を添え激励したという。発会式は3月9日、8月には前掲55『詩人祭』を発行した。

小島貞一は犀星の年長の甥でまさに文人趣味の詩人であり、厚見他嶺夫は少し後ではあるが『日本詩人』大正15年2月号の「詩集『はるそだつ』を読む」で、「近来の民衆主義と称する一派の跳梁は、日本に於て詩を一層の墮落に導いて、技巧に於ては散文以下に内容に於ては流行思想を宣伝する以外に、何等詩としての幽玄な妙味を起こさしめないで、詩壇をより一層の混沌と無節操に導いたという非難は甘受しなければならない」と述べていた。福井の島崎圭一も「虹の魅惑」(『北国』大正13・3・22~28)で民衆派詩人を批判していた。久村五郎は「金沢詩壇の趨勢」(『北毎』大正12・10・16)で「金沢詩壇なるものの殆どが萩原朔太郎張」と見て

いたが、その久村が編輯する前掲26『夢の笛』は『舵の座』(前掲30、北陸詩人協会の一つの中心であった金沢詩人会の詩誌)を「高踏派詩専門誌」と紹介していた(久村自身は大正13年12月12日の『北国』『不かうもの』を読む)の中で自分を国家主義者と称している。大正12年3月に金沢一中を卒業後、松任近在の旭小学校で代用教員をしていたが、この当時は大連に渡っていた。

以上によって北陸詩人協会の結成は、当時の北陸三県の詩壇の隆盛を物語るものであると同時に、アンチ民衆詩派的性格の組織であったことがうかがえると思う。

北陸詩人協会の発起人は「詩を味はうこと」(『北国』大正13・4・10)の中で次のように述べていた。

真実に芸術を味はう為には、最も純化され、陶冶され、訓練された感情を用意しなければならぬ(中略)芸術鑑賞に際しては何処までも感情が主であり、理性は従の位置を占むるであろう(中略)詩は我々の感情を最も端的に率直に表現し得た所のものである。(中略)総ての芸術を味はう為には、何人も詩的情緒を養う必要がある。

これより先、太田皐月は「夕暮は木の葉ぞそよぐ」(『北毎』大正12・11・9)で次のように金沢の詩人を批判していた。

文学は思想に根ざして花咲く事を知らないのか(中略)時代思想と云うものに背景づけられ、時代思潮を基調としたものでなければどこに其芸術が一詩一が持つ民衆との交渉があり得るか、時代思想を無視するもの即ち民衆を忘れたる芸術であり、又敢て亡ぶべき運命にある詩と云はなければなるまい。敢て問う、現今我金沢の詩壇に一人の時代思潮を理解したものありやと。

これに対して飯野映二は「停車場から」(『北毎』大正12・11・16)の中で

近代思想に通ずる事は大切なことかも知れない、けれどそれが詩の全部ではない、民衆を知る前にもっとよりよく自己を知らなくてはならない、まづ自己完成だ、私達は自己の胸底に存在する芸術の島の荒廃している事を忘れてはならない、詩は個性だ。

と反論した。ここに明らかなように飯野は近代

思想に通ずる事と自己完成とを別個のものと考えており、自己完成つまり「自己の胸底に存在する芸術の畠」を培うことを民衆を知る前になすべき急務としている。それは北陸詩人協会の発起人が述べていた、「理性は従の位置を占むる」「詩的情緒を養う必要」と同じ見地に立つものと言えよう。これに対して太田皐月は文学の思想性を問題にし、時代思潮を基調とする所のみ民衆性を考えている。彼が言う時代思潮の内容は不明であるが、理性を主位に置く太田と感情を主位に置く北陸詩人協会発起人との文学観の違いは大きい。そしてプロレタリア文芸に進む可能性は勿論太田の方にある。

大正13年の『北国』の「北国柳壇」には、岡田澄水・福村一路・喜多一二らが登場して石川県の川柳界に新風を吹き込んでいるが、彼等が進んだ方向は川柳に新しい思想をもち込むことにあった。そして喜多一二がプロレタリア川柳に進んだ一つの条件は、彼が理性の文学を求めていたことにあったと考えられる。

北陸詩人協会に厳しい批判を加えたのは大滝友二である。彼は「芸術に隷属する前に生活に隷属せよ」(『北毎』大正13・2・28)で

彼等が思っているところの抒情詩とは一体何だろう、それは雑社会生活的感情を、むしろ病的にまでひきつってそこに遊蕩しようとする彼等の示す作品によって、容易にうかがい知られるところである。

と述べ、前述したようにプロレタリア文芸を志向する一面を示したのであった(もっとも大滝はこの後、例えば前掲72『炎青景』などでは村井武生から「菊の匂いを持った弱々しい君の詩情」「君の幻想は餘りに自慰の世界に住みなれていはすまいか」と評される詩を作っており、プロ派の詩人として登場したのは昭和に入ってからであった)。

北陸詩人協会に関連して演劇運動にふれておく。協会は郷土芸術を起すことを目的の一つにあげ、事業の一つに小劇場演劇をあげていたが具体化されたようすはない。しかしこれが一つの契機となったものか、大正13年9月に先駆座

小劇場が旗揚げした。佐藤史の「先駆座小劇場その他」(『北毎』大正13・9・26)には

金沢としては何年来の宿題であった小劇場が我々の手に依って創立された(中略)菊池寛氏の父帰ると有島武郎氏のドモ又の死と独乙の表現派作家ミートバリバル氏のクレーズ光線(これは表現派の演出による)とが選ばれている(中略)一人残らず金沢の人ばかりである。

とある。しかし何故か先駆座は劇の上演に至らずして分裂し、新たに青鳥座が結成されたが、これも上演に至らなかったことは『金沢市史』が述べている通りである。(市史が青鳥座を大正12年としているのは13年のミスプリントであろう)。青鳥座については同じく佐藤史が「青鳥劇団公演の前に」(『北国』大正13・10・10)を書いているが、

之迄雲の上におかれた芸術と云うものが本当に地上に生くる人間の心の糧としてなくてはかなわぬ物である事を知って来ました。今それらのよき人達によって「民衆の芸術化」は叫ばれています(中略)もっと人間の内心に訴えて来る「美」で張り切った劇の最初の運動をなすために、私達若き者のグループが出来ました。

と述べている。芸術の民衆化ではなくて、民衆の芸術化が主張されるところに、「青い鳥」が選ばれた所以があったのであろうか。とまれこれも、金沢の文芸界に於ける一つの新しい動きではあったが、結局は不発に終り、新劇運動の開始は昭和2年のトルコ座の結成にまたねばならなかった。

4 小島小夜夫の文芸論

『無産芸術』が大正13年5月号で廃刊となったとすれば、昭和2年のプロ芸金沢支部結成までの約3年の間、プロ文化運動の歩みはさほど顕著なものとは言えない。とくに大正13~14年では新聞紙上で見る限りでは僅かに小島小夜夫の活躍が目立つ程度である。

小島は金沢市郊外の米丸村の農家に生れた。一時大阪へ出ていたが、『日像』同人の頃以降は『金沢新報』(或は『北国日報』か)につとめていた。彼が大正11年頃から精力的に作って行く

童話・童謡・民謡・小曲などには社会性はほとんどなく、僅かに詩の内に前掲「白路を踏む」程度の社会性を持つものがあるに過ぎない。しかし、彼が大正13年以降に時折発表した論説には注目すべきものがある。

「文壇漫語」(『北毎』大正13・2・1)

「童謡の私観論」(同上大正13・3・14)

「最近文壇の動静」(『北国』大正13・6・12～13)(『北毎』大正13・6・17～24)

「階級芸術と社会性」(『北国』大正13・11・7～10)

「文芸観上の婦人問題—女給組合と女工組合—」(『北毎』大正14・2・6～13)

「農民文学の提唱」(『北国』大正14・9・3)

「文芸と階級に就いて」(同上大正15・1・27～29)

「郷土文芸家に与ふ」(『北毎』大正15・1・26～2・2)

これらで小島が説いたのは、芸術は社会改造の先駆たるべきものであること。現文壇の行き詰りはプチ・ブル性に由来すること、その中で『文芸戦線』の発行が注目されること。芸術にはブルジョア芸術とプロレタリア芸術があり、前者は芸術至上主義であること。従来「女・子供」でかたづけられてきたその女性の自覚とともに児童尊重の気運が生じ、その中で童謡の勃興があり得たこと。文芸家は婦人解放(奴隷的家族制度から解放)と自由平等の人権擁護の任務を担うべきであり、職業婦人の団結をも援助すべきこと。農民文学の水先案内は第四階級の文学であり、農民文学は真に無産階級の文学として建設されねばならないこと。などであった。そして彼は「郷土文芸家に与う」で

時はもう黎明に近いではないか(中略)もっと勇敢に嵐の旗を振って郷土文壇の一隅から文芸革命の烽火を拳げて貰いたいと思う、未来は俺達プロレタリアの社会である。

と呼びかけたのである。

『日像』当時のプロ芸術の台頭を必然としながらも「自己の生命に目覚めねばならぬ」とし

ていた段階から、芸術至上主義を否定して階級文学を主張するに至った小島は、「童謡に就て」(『北毎』大正12・10・25)で少年少女時代への大人のノスタルジアとして童謡を見、「土に帰る」(『北毎』大正12・12・18)では「真実の芸術は土から生まれる」として田園を讃美していた段階からも確実な前進を示していた。しかも、当時の『北国』『北毎』を見る限りでは、石川県の文芸人としては小島以外にこうした主張が見当らず、小島がプロ文芸を主張する代表者たるの観があった。

しかし、大正13年には詩丘薫一が「北国文壇の状況」(『北国』7月30日)で次のように述べていたことも注目せねばならない。

最近文壇の動静—小島小夜夫氏。小島君がこう言う物を書くのかね—と言って驚いていた人のあったのを君に知らず(そう言ったものでもないよ君)。(中略)郷土文芸発展の為に野口雨情調の美しい君の民謡・小曲をもって最善の努力を尽されん事を期待する。

折角の小島の階級芸術論も、彼がこういう物を書くのかね、で終わっている感があり、柄にもない論説よりも、せいぜい美しい民謡を作り給えと言われているようにも見える。大正13年当時の金沢文壇の階級芸術に対する反応の一面がうかがわれると同時に、小島の作る民謡・小曲と論説とのギャップの大きさが、反応を小さくしてしまっていたことも考えられる。

小島は大正13年の終り頃から、4行詩(或は3～5行詩)とも言うべき短歌を『北毎』に発表し始めた。最初は

○一生に たった一度の真剣な 恋を思った
半生の夢 (大正14・1・16)

と言った西出朝風調の短歌であったが、次第に

○さびしさに 酒などあふらむ斯く思ひ 酒屋の前を 三度行き来ふ (11月17日)

○二十七— とかくわれに悩み多き 歳にて ありき しみじみ想ふ (12月11日)

○雪の朝 咯血をして死にし友 尚革命を口にしたりき (12月25日)

○火乏しき 火鉢をかこみ熱心に 友共産を説ける 雪の夜 (同上)

○何となく淋しくなれば 大という 字を書く癖を 持てる指先(大正15・1・19)

○世帯など持たむなど云ひ 「はははは」と笑ひしあとに 襲ふ佗びしさ(3月25日)

といった啄木調に移って行く。西出朝風調から啄木調への移行は、一応プロ芸術的なものへの接近と言えなくもないが、無気力な哀愁という点では一貫している。なお共産の友というのは実在の友なのかどうかは分らないが、彼には気に入った題材だったらしく、昭和4年10月2日の『北毎』にも、

○反逆者と誰れが云へるやその友は情にもろき性なりしかな

○その友もまた刑務所に行きしとか秋風の夜に聞ける寂しさ

○一々に傾くごとく説きたりし共産の友のなつかしき顔

などの短歌を発表している。そして彼自身遂に共産の友を憶う存在以上には進むことなく、プロ芸金沢支部にも参加していない。しかし、前述したように彼の論説を見る限りでは、『無産芸術』からプロ芸金沢支部へ橋渡しする一つの役割を果たしていたことは明らかである。

5 大正14年末からの新しい動き

プロ文芸面では、小島小夜夫の独り舞台の感のあった石川県で、無産政党や労働組合の面では大正14年6月の政治研究会の発足を皮切りとして、同年10月の石川県労働組合期成同盟会から大正15年2月の石川合同労働組合の結成という新しい動きが見られた。こうした状況を反映してか、また大正14年12月の日本プロレタリア文芸連盟の結成という中央での動きに刺激されてか、プロ文芸の面でも大正14年末から新しい動きが見られた。

政治研究会金沢支部の中心人物の一人であった本田昂は、大正14年の『北国』に「新興の芸術」(11月4～5日)、「一つの漫論」(11月27日～12月1日)を発表した。前者は芸術と個性の不可分の関係を前提としながら、それにとどま

らずにその個性が「社会意識の下に於ける個性」でなければならぬとしたものであり、後者はインテリのプチ・ブル性を指摘したものであった。なお12月24～25日には本田は「革命と婦人解放」が載っているが、或はこれも本田昂のものかも知れない。

大正15年に入ると、石川郡山島村青年団のリーダーで後に『北毎』に入った田島幽峰は、「文芸の民衆化」(二)(『北国』1月8日)で

試みに14年の文壇を見るがよい―異彩を放った者は一人の細井和喜蔵氏である。彼は所謂文士ではない、15ヶ年を一職工として奴隷苦に忍従し、牢獄の如き資本家の鉄鞭に虐げられながら、深刻悲壮なる階級戦を描いた。彼の『工場』や『女工哀史』は14年度の文壇が生んだ、誇るべき作品である。

と述べた。また前掲65『あさしほ』の中本芳路は「黎明を期す北陸文壇へ」(『北毎』1月12～19日)で次のように述べている。

冷厳な自然や環境の圧迫に猛然として反抗し、戦者の様な強い黒色を帯びた積極的情熱を持つ者と、外部からの圧迫をじっと忍従して静かに度しく生きてゆく消極的な安住者を知る、創作家としての詩丘薫一氏は前者である。所謂忍従的な諦観に裏づけられた詩の心持ちは新興階級の詩ではない。

ここで詩丘が出て来るのも面白いが、以前には、プロ芸術に関心を抱くものもあったであろうに、『北国』や『北毎』新聞紙上では小島以外の発言者が見出せなかったのに対して、この段階では複数の発言者が現われることに注目したいと思う。

更に注目されるのは『北国』紙上での本田昂と亀田義一・大島卓爾との論戦である。本田昂「芸術品の非永久性」(1月19～20日)亀田義一「芸術の本質を論ず」(2月3～9日)、本田「美感と芸術の関係―亀田氏の質問に答う―」(2月10～19日)、大島卓爾「社会批評の文学」(3月4～12日)、本田「階級芸術について―大島卓爾君に一」(3月18～23日)、大島「時代精神の芸術化」(3月26～4月7日)と続いた論戦は、大正13～14年段階の小島小夜夫が無視されたに等しかったのに対して、石川県の文芸界が

一つの新しい段階を迎えたことを示すものではなかろうか。

論争の内容は表題が示す通り、本田が芸術の時代性・階級性を説いたのに対して亀田が優れた芸術は時代を超えた力を持つと批判し、本田がこれに答えて世界観の問題に入り、大島との間では階級文学成立をめぐる論争となったのであるが、そうした論争内容以上に注目したいのは大島卓爾の経歴である。大島は肺結核で大正15年11月6日に死亡した。24才であった。『北国』11月8日の「大島記者逝く」、11月11日の「大島氏を憶う」、11月20～26日永島峰男「大島君の憶出」によれば、大島は小学校中退で印刷職工となり、独学で『金沢新報』記者から『北国』記者となった。永島によれば大島は社会思想・文芸批評の書物を貪るように読み、急激に社会主義に接近したが「彼のこの思想的急進は大正12年の一事件で転換を来した」「唯物論から唯心論に入らんとした彼は、思索生活と読書生活に精進しながら、その未だ懷疑思想を脱し得ずして、悲しくも病にたおれた」という。単純に、プロ文芸に共鳴するか否かという段階は過ぎて、大島は広い意味での転向者としてプロ文芸に否定的な疑問を投げかけたのであり、これに答える本田には政治研究会（大衆教育同盟）金沢支部の一員という実践的立場があった。このような両者の論争は、石川県でのプロ文芸運動開始の日が近付きつつあることを示していた。

翌昭和2年6月5日の『北毎』に、前掲97「紫焰」の上出一夫は「プロレタリア文学の目的意識に就いて」をのせている。

一つの独自なる分野を有する文学が、近時稍ともすれば其れ自体の任務を忘れ、自己の分野を超越し、文学の政治的進出の中に其の目的意識を標榜するかの如き傾向を示すの感がある（中略）雷同的赤化詩人？の叫びが如何にして新社会への熾烈なる批判者であり、更に来るべき未来への適確なる予言者となり得よう。

このような上出の主張は、主観的には芸術至上主義を否定し、ブルジョア文学との闘争をプ

ロレタリア文学の目的と考えた上での主張であり、後述するようにプロ文芸家の組織化が進められつつあった段階での発言であった。組織的な運動開始を目前にして、統一的な動きと分裂的な動きとが眼まぐるしく交錯する。これはプロ芸金沢支部が発足して後のことであるが上出は「わし達の心臓を信じよう」（詩）（『北毎』昭2・9・4）を書いている。

わし達はもうくだらない理論にあきてしまった——明日を信じる生命の偉大さが——わし達には何よりも素晴らしい理論だ——所詮は理窟で動かない人間だ——わし達は、もうわし達の心臓を信じよう。

プロ芸金沢支部に参加した一人に太田皐三がある。前掲「夕暮は木の葉ぞそよぐ」の太田皐月と名前が似ており、或は同人物かと思われるが明らかでない。前掲77「前奏曲」は彼の個人雑誌である『前奏曲』を発見し得ないが、島穀秀雄は「坐っている散策」（『北毎』大正15・2・25）で「前奏曲」の中の太田の作品を、

新鮮さと、かなしきユーモラスとでも言ったようなものが君の筆先ににじみ出ている。またニヒリスチックな或るものがひそんでいるように思う。その意味に於て私は君の作品にはすべてあるなつかしきを持つ。

と評していた。島穀は『北毎』記者で「逃げる五月の雑筆」（『北毎』大正15・7・23）に

ニィチュェの先駆とも言える無政府個人主義の彼ースチルネルーの思想は、私にとって忘れることの出来ない味ひを示してくれた。

と述べ、アナーキズムへの傾斜を示していた。

太田は「怒りの強調」（『北毎』大正15・12・23）で現在の金沢詩壇は穏健で余りにも自己のみを見つめていると批判し、怒りの詩人を待望したが、彼のいう怒りとは搾取と被搾取の社会の中で虐げられている階級の「正しい欲求に根ざした叫びであり怒でなければならない。現実生活の暗さの底にあって、常に一つの方向を明確に意識して、その中に一つの強い輝きを持っていなければならない。それは未来への光明であり、希望であり、信念であり、情熱であり、意志である」とされている。そしてこの趣旨は

「人生の光明的要素」（『北毎』昭2・1・22）でも受けつがれた。ついで「四月初めの記」（『北国』昭2・4・20～23）で太田は

僕は、詩壇の寂寥は、大きな転換の変革期にあると云ひたい。而して島薮君自身も変革の過程にあるのではないだろうか。（中略）

彼等は（中略）社会主義意識に目覚めんとしている（中略）幾多の不合理を発見し（中略）社会改革の階段の一員を自覚し、その目的を判然と把握し得るであろう。その目的意識を文芸の上に現してこそ、今のデレンマより逃れ得ることは易々たるものである。先ず社会意識に目覚めなければならないのだ。

と説いている。前掲上出一夫の主張と好対象をなすものである。

変革の過程にあると指摘された島薮は、「六月・手」（『北毎』昭2・6・19）で「私はいま大きな苦悩にぶつかっている」と告白した。そして和田竜一は「金沢の観点に立つ一無産文学小論」（『北国』昭2・7・23）で労農芸術連盟を支持しながら

某紙上に「六月・手」とかいう雑文を出したS君よ君は、一番その情熱を社会運動に向ける気はないか。さすればプチ・ブルジョアの懶惰主義のしっぽを出したものだ。

と島薮にハッパをかけ、更に

本紙で見る喜多一二君の「大阪放浪詩」はいいものをもっている（中略）自分の様な性格の人間と違って君がきっと思いきった運動者になることをのぞんでいる。まだよんでいないならマルクスを学んでくれと喜多一二に期待した。

和田は金沢に労農芸術連盟の支部が出来ることを期待していたようであるが、プロ芸金沢支部の結成となったので参加はしなかったようである。プロ芸金沢支部に入った島薮はナップ段階ではその有力な担い手として成長していた。しかし太田皐三は昭和2年10月に早くもプロ芸金沢支部から除名されている。プロ芸支部結成をめぐるの、それぞれの苦悩に満ちたであろう慌しい動きであった。

6 プロ芸金沢支部の結成

プロ芸金沢支部結成の重要な契機となったも

のは、労働農民党石川県支部結成への動きであったと考えられる。同党支部結成への動きは直接的には大正15年12月に始まる。石川県社会運動史刊行会『昭和前期の石川県における労働運動』によれば、12月1日を機として全国的に展開された議会展散請願運動には、請願運動協議会石川地方委員会の活躍があったが、その直後から石川県における無産団体の統一と政党組織の準備が進められることになったと述べられている。その中心は大正14年6月に結成された政治研究会金沢支部（翌年5月以降は大衆教育同盟金沢支部）及び大正15年2月に結成された石川合同労働組合（評議会加盟）であった。そして翌昭和2年1月の石川県無産者団体協議会の設置、6月の石川県無産者協議会の発起を経て、9月の労働農民党支部結成となる。この1ヶ月前にプロ芸金沢支部結成があるわけである。

プロ芸金沢支部結成との関係で特に注目されるものは6月7日に発起人会を開いた石川県無産者協会である。無産者団体協議会から無産者協会への方向転換について、『北国』の記事を追って見ると、1月に組織が決定された無産者団体協議会は、委員会も開かれないうちに冬眠状態となっていたが、メーデーが近づくとともに活気を取りもどして5月13日には同協議会主催の時局問題批判演説会を開いた。演説会当日の5月13日付『北国』は「今回確立すべき新方針は従来の運動方針たる『急進』を矯め、かつ団体単位を廃して全県民特に全市民層に訴へ全市民層を獲得しようという有力な意見が幹部間に起って来た」と報じており、この頃に個人組織への転換が考えられていたことが知られる。ついで5月20日付『北国』には、13日の演説会の成功に勢いを得た協議会は、6月下旬を目標に労働農民党支部旗揚げの準備を進めているが、維新同盟（大正13年12月に結成された、普選後の真の民衆党たらんとし、貴族院改革などを目標にかかげていた、無産者団体協議会加盟団体の一つ）は社会民衆党を担いで起つとの

説がある、とあり、協議会内に左右の見解の対立があったことが知られる。そして、5月28日付『北国』は26日の同協議会幹部会の結論を次のように報じている。

労働団体は廿いくつあるといっても結束して戦線に立ち得るもの極めて少なく、到底それらを単位とした共同戦線では余りに頼りないのみならず、却って団体行動に不一致を見ねばならぬというので、此の際むしろ各団体を捨ててもっと広く政治、宗教、芸術各方面において無産運動に理解を持つ人々をも悉く網羅した一大啓蒙的団体に変更しようと意見の一致を見、名称を「石川県無産者協会」と附し、政治教育、共済、芸術、出版、組織宣伝の五つの部門を設け、全然新陣容をととのえることになった。規約および趣意書は幹事北川重吉氏の手許で早速起草に着手されているが、一方プロ文芸家をはじめ県下各方面にわたって加入を勧誘し近く正式に名乗りをあげるという。

前掲5月13日の『北国』の記事では「急進を矯め」とあったが、ここでは啓蒙的団体への変更とされている。これが「急進を矯め」ということであったと考えられる。当時の県下労働組合の状況を詳にし得ないが、労働組合としての実質をそなえていたのは石川合同労組だけだったかと考えられ、従って、団体単位か個人単位かを論ずる以前の状況にあったのではないかと思われる。そこで無産運動に理解を持つ人達を広く網羅した大衆団体を組織する方針に切りかえられたものであろう。6月18日の『北国』によれば無産者協会の賛助員として吉野作造・大山郁夫・新明正道・北国新聞主筆篤田健二ら各方面の名士を網羅したとあるが、これもできるだけ広くという配慮のあらわれと思われる。もっとも、広くと言っても、中心になっていたのは北川重吉をはじめ労農党系の人達であった。

ところで、無産者団体協議会から無産者協会への方向転換は、前掲5月28日付『北国』に「プロ文芸家をはじめ県下各方面にわたって加入を勧誘」とあり、6月9日付『北国』に「入会を申込む市内のプロ文芸家数名あり」、また7月8日付『北国』に「知識階級すなわち一般精神労働者中の加入申込が続々とあり」とあることな

どによってインテリ層の一定の支持があったことがうかがわれる。7月8日付『北国』は続けて、石川県庁の職員の中からも二十余名の入会申し込みがあり、上からは「ある種の圧迫手段を講じつつある」と報じていた。更に6月9日付『北国』によれば無産者協会は、当面の具体的な運動の一つとして「目醒しく進出した無産階級文芸の使命を認めて牧歌的意識に低迷するわが郷土芸術を正しい進路に方向づける運動」をかかげていたことも注目されよう。

以上、簡単に『北国』の記事を追って見たが、そこにうかがわれるのは、無産者団体協議会の中心勢力であり索引車でもあった石川合同労組と大衆教育同盟金沢支部（両者はともに労農党系で人的にも重なり合う部分があった）の幹部達が、石川県での団体連合の限界を痛感して積極的にインテリ層の組織化にのり出したのではないか、ということである。そして組織化の対象となったインテリ層の一つの重要部分としてプロ文芸家が考えられており、彼等によるプロ的郷土文芸運動が期待されていた。前述したように、石川県のプロ文芸家の活動は徐々に前進しており、大正15年には新しい様相を示していたが、しかもその組織化は、労働運動や無産政党運動を推進しようとする側から行なわれた。それは嘗ての開拓社結成と同じパターンであり、その一層拡大された形であったと言えよう。

6月7日の発起人会で趣意書や規約の決定を見た無産者協会は、加入申込者60～70名に達した時点で発会式を挙行する予定とされ、更に7月17日に創立大会を持つとも報ぜられたが、7月中旬には発会式を持たないままに、石川県薬剤師会有志や労農党支部組織準備会とともに健康保険法改廃問題に取り組んで行った。それは広くいえば、無産者協会がかかげていた目標の一つである「無産者相互の生活を擁護する共済事業」に入るかも知れないが、「広く政治・宗教・芸術各方面において無産運動に理解を持つ人々をも悉く網羅した一大啓蒙的団体」という

当初の方針からは逸脱して、早くも政治運動に飛び込んだとの感をまぬがれない。そして、無産者協会がこうした政治活動に入っていくとすれば、労農党支部組織準備会との区別がほとんどなくなってしまうのであって、無産者協会は結局は労農党県支部とプロ芸金沢支部とに解消して行ったと考えられる。

プロ芸金沢支部の『リーフレット（1）』に見える「活動報告」には「八月十九日発会式を挙行し」とあるから、正式発足は8月19日であるが、『北国』昭和2年8月7日付によれば、「さる5日、意を同じうする若き芸術家20名相計り日本プロレタリア芸術連盟支部を設立し、当日直ちに本部に加入した」とあるので、実質的には8月5日の結成と見られる。プロ芸金沢支部は8月27日に第1回文芸座談会を開いたが、8月31日付『北国』文芸欄の「まにまに」は

プロレタリア連盟の人々も自己の立場から作品を評すべきは勿論と思うが、その見点確かならずと見受けられた。芸術にはむしろ縁遠いと思はれる本田君などの助力が必要でなくなる様に。

と述べている。かなり厳しい批評であるが、ここで本田君とあるのは本田昂のことであろう。前述したように本田は大衆教育同盟金沢支部の有力幹部の一人であり、正式発足直前の労農党石川県支部の中心人物の一人でもあった。無産政党の活動家というイメージが『北国』に「芸術にはむしろ縁遠い」と書かせたのであろうが、彼が『北国』紙上でプロ文芸に関する論陣をはったことは前述した通りである。この本田が発足当初のプロ芸金沢支部のリーダー格であった事が、上掲「まにまに」からうかがわれるが、プロ芸機関誌『プロレタリア芸術』（昭和2年7月創刊）の10月号には本田昂の「北陸のプロ芸運動」がのっており、これも本田が支部の代表格であったことを示すものと考えてよからう。なお、『プロレタリア芸術』昭和3年1月号の「連盟報告」には

金沢支部（金沢市外野々市町小島方）、最も活動的な支部の一として、封建的色彩濃厚なる金沢に於いて、果敢なる芸術運動の展開に努力して居る。

とあり、金沢支部が全国的にも注目される支部であったことが知られる。小島とは小島源作＝三重昂であろう。小島は当時は名古屋新聞系の『北国日々新聞』の記者であったと思われ、同じ『北国日々』にはやはりプロ芸金沢支部員であり労農党石川県支部の中心人物の一人であった北川重吉がいたと思われる。そして前掲『リーフレット（1）』の責任者は北川重吉であった。本田昂、小島源作・北川重吉らは『北国』的表現に従えば「芸術にはむしろ縁遠い」人達である。しかも彼等が中心的な役割を果たしていた所に、労農党系インテリ運動家のリーダーシップが明瞭にうかがわれる。別の面から言えば島藪秀雄・大滝友二ら文芸家の理論的な弱さであったであろう。プロ芸金沢支部組織のイニシアティブだけでなく、発足当初の金沢支部のリーダーシップもいわゆる文芸家の側にはなかったのである。

む す び

全国的な同人雑誌の全盛期において、石川県でも大正10～15年の間に百種を超える文芸雑誌が創刊された。伝統的な古典芸術が根強く生きつづけている石川県で、こうした雑誌の盛行はたしかに注目すべきものがあつた。これら文芸誌の多くは短歌・詩を中心とするものであり、内容的には文人趣味的なものが多かったが、中には青年らしいヒューマニズムから民衆芸術への傾斜を示すものもあり、更に進んでプロレタリア芸術に共鳴を示す傾向も現われている。

こうした傾向をふまえて最初に組織的なプロレタリア文芸運動を展開しようとしたのが大正12年10月に結成された開拓社であり、同年末に創刊された雑誌『開拓』であった。東京での労働運動の経験をもつ寺西三郎らに四高生が協力し、地元文芸家を結集しようとしたものである。しかしこれは、『開拓』から『無産芸術』への発展が見られたものの、大正13年の半頃には消滅したものと思われる。何ととっても当時の石川県下の労働者の運動はまだ力の弱い段階に

あった。

この大正13年は北陸三県の芸術派詩人を結集した北陸詩人協会の結成された年であり、小劇場運動の胎動が見られた年でもあった。第一次世界大戦後の相対的安定期の中で、新興文芸興隆の気運は続いていた。

プロ文芸を唱道する評論は『無産芸術』に投稿していた小島小夜夫によって続けられて行ったが、大正14年6月の政治研究会の発足に始まる石川県下の無産政党結成運動・労働組合運動の新しい展開の中で、再び組織的なプロ文芸運動の開始期をむかえる。それは大正14年末頃からのプロ文芸論の活発化に始まり、大正15年末とくに昭和2年5月頃からの無産政党(労農党)結成の動きの中でプロ芸金沢支部として結実した。プロ芸金沢支部結成のイニシアティブも、発足当初のリーダーシップも、労農党系運動家に握られていたが、それはプロ文芸作品の創作よりもプロ文芸理論の紹介が先行して来たことの必然的な結果でもあろうし、石川県のいわゆる文芸人の理論的弱さでもあったろう。労働者の運動よりも、どちらかと言えばインテリの運動が先んじて現われる観のある石川県であるが、プロ文芸運動の組織化が、インテリであることはまぎれもないにせよ、労働運動家・無産政党活動家によって進められて行ったことは注目されることであった。そしてこのことは、プロ芸金沢支部の活動をも規定しており、文芸座談会なども持たれてはいるが、その活動の多くは労農党金沢支部と一体となった政治運動にそまがれていた。従ってプロ芸金沢支部の結成は、石川県でのプロレタリア文芸運動の開幕を告げるものではあったが、文芸運動としてはなお未熟なものであり、文字通りのプロ文芸運動は次のナップ段階に入ることとせねばならないであろう。

〔附記〕『開拓』に「家族制度の社会的意義」をのせている荒木雄次郎については、新木氏夫人昌子氏の御教示により、新木友二郎であることが確認できた。誌上をかりて厚く御礼申し上げるとともに、御入院中の新木友二郎氏の一日も早い御全快を御祈り申し上げる次第である。

げるとともに、御入院中の新木友二郎氏の一日も早い御全快を御祈り申し上げる次第である。

〔再附記〕本原稿提出後、四高社研創設時のメンバーの一人だった野村二郎氏から、『開拓』その他についての御教示を得、また石堂清倫氏からも同じく御教示を得た。併せて厚く御礼申し上げるとともに、次の機会に生かしたいと思っていることを附記しておきたい。